

たまたま本講座編集部から意見を求められた

日本文学史はあまりに少いように感じられる。

語教師向きの専門書はあつても、大衆向きの

本では、国文学者やある種の現代文学者、国

くことのびきないもの^なの^なに、今日の日

進展~~の~~基礎的地盤をつくるために、欠

遺産についての正しい理解を与え、日本文学

日本文学史は、国民大衆に、日本の貴重を

小倉金之助

一般向き日本文学史への要望

120

見直し 上段ノミ

の

五

行方

(20x10)

ので、一般向きの日本文学史にたいする希望を、^{ごく}簡単に述べてみたい。

その前に、多数の青年が今日現にどういよう日本文学史の教養を受けているのか、その実情を具体的に明らかにするために、近年私の二人の孫たちが高等学校で使った二種の教科書を検討してみよう。

その二つの教科書は、時代区分が同一であり、その内容においておのづかしの方向において、私のよる左巻人眼からは、ほとんど全く同

いくつかの細かい点を除けば、ほと

一段二道ム

表
六号

No. 3

近代	近世	中世	古代後期	古代前期	年表・索引・国文形態展開表	本文約九万字 四版二三個	遠藤嘉基 譯 日本文学史新編 (昭和三年)
三二	一六	一八	一八	一四	約 0% ↓		共
明治大正昭和時代	江戸時代	鎌倉室町時代	平安時代	大和時代	年号一覽表・年表・索引	本文約九万字 四版六個 (文庫版)	山岸德平 著 新日本文学史 (昭和三年)
三三	一六	一六	一九	一三	約 0%		規

14字

14字

(20x10)

6
ホ

様に見受けられ、ページ数の配分も、戦後を
 含めた近代が全体の三分の一を占めていゝ点
 まであらう。それに両著書とも、専門書の
 抜き書きであるか、固有名称（人々作品の名）が多
 なる一方、説明があまりにも短く、かつ断片
 的なのである。徒然草や源氏物語など
 どの校註にもむずかしい学生たちには、多少は理解で
 きるのかも知れなからう。せんせい古い文学
 の素養を欠く私に、^{は、およびを教養書として}文学作品を
 理解するの
 がむずかしい。まして、それを鑑賞する余裕

戦後

(20×10)

まるてい

一行へ

No. 5

で、ただ「ああ、さうですか」というよりほかに、言うべきことが

とえらんず、

作昌の文学史的

も ~~それ~~ ~~の~~ 意義を知ることなど ~~改~~ 不可能

ないのである。それに、遠藤氏らの本には、田村

泰次郎の「舟体の内」を、山岸氏の「本」は、そ

うほかに舟橋聖一の「雪夫人絵図」をあげてゐる

し、~~それ~~ サルトルヤカミユの名まで真見え

ている。

いま試みに遠藤氏らの本から、索引によつ

て人名を数えてみると、上代 一二名、中古

二一名、中世 二六名、近世 四三名、近代

一〇六名 ~~それ~~ った。ところが近代の部にある

であ

の本文



~~人名を~~ ~~一~~ 一々数えてみると一九二名

になる。つまり索引には八六名の文学者の名

が落ちていたのである。(索引のなかには龍

胆寺 雄、恭原恭次郎、本庄陸男のよくな程

度の人が見える ~~一~~ 島村抱月、土岐善麿、

北原白秋、三好達治などが見えないし、与謝

野寛 ~~な~~ とは本文にも、もちろん索引にもな

く、たゞ不思議にも年表のなかには没年が見え

ている。 ~~た~~ 驚いたことに ~~山~~ 山岸氏の本の索引

も、 ~~ま~~ やはりこの調子なのである

また、
のこの

果
三
格

No. 7

てういうことが解つく来ると、これらのお

和書はたが索引が粗雑なはありでなく、内容

さえも粗末なもので、文学史教和書として

の獨創性“を欠いたものではないのか、とも

疑われにくる。素人の癖にはなは

だ借越をから、

いま手元にあるルネ・ドクミツクウフラ

ンス文学史は、第一次大戦の終り

までを扱い、一九二五年までの年表を載せ、

これまで五二万部を賣ったと



その古さを笑うよりも

るほど普及した教科書であるが、そのなかには
 一八六五年後に生まれた~~作家~~、ロマン
 ロウエ、クロード、~~グレン~~、グレン
 ー、フルースト ^{は、}まだ載っていない。こ
 の本はもうでなく、評価がまた不安定と思わ
 れる ~~比較~~ 新しい作家 ~~は~~、教科書に採
 上げられないうが、取らくヨロパの常識
 なのであり、基本的な教養の重点をおく高等
 学校用の文学史は、それくらい慎重な態度を
 とって ^よいのかと思われる。

二下

この考えをくると、いま日本で使われている

教科書などは、遠藤氏が言明している

よるに

文学史本来の使命にかんがみ、時代と文

学との関係を明らかにし、文学作品の成立

発展とその歴史的必然性を説くよう留意

した
よう左

なるといえるのであろうか。ぶかい反省

をお願いたいたい。
~~お願いたいたい。~~

6下

木
一行
一行

6 P 277

かような

高等学校の

~~現状を前にし~~

現状を前にし

をから、私はいよいよ主題に入りたいと思う

それは専門的を通史とか、特殊を研究書では

なく、たが一般向けの日本文学史に對する

要望なのである。(こゝで、藤村作

氏の『国文学史總説』(増補版、昭和二九年)

久松潜一氏の『日本文学史』(昭和二七年)

などは、それを違つた意味で、こゝには取

扱われたい。

まず第一に、時代と文学の關係を明らかに



し、文学作品の成立・展開とその歴史性を、
 一般人が理解できるように、興味あふく書か
 れた、いはば本格的な文学史。これが私
 の要望する第一種の文学史である。それは文
 獻的・書誌的なものではなくまた單なる文学的事実の羅
 列でない、ほんとうに新しい歴史の立場か
 らみた文学の歴史でありたい。私はた
 とえば吉田精一氏の『新日本文学史序説』(一
 昭和二二年)のよき精神で貫かれた、一層
 洗練された林成林、しかももつと平易な文章

内付けら

で書かれたものを期待する。(吉田氏の「明

治大正文学史』(昭和一六年)も、第一種に

準じるすぐれた作品であつた。

と云ふで一般人のあふは、第一種による

に本格的びや堅い文学史でなく、もつと常

識的なものを要求する人にかある。そこで文

学なきを讀者の要求に答える、常識的知識の

集成として『文学史』(これを第二種の文学史

とよぶこととする。この種のもつは、近代史

について、伊藤整氏の『新著』(近代日本の文

きゆめて

学史 (昭和三年) によつて、かなり見事
 に与えられたといつてよい。ただ人名の氾濫
 が気にかかる。それはこの書物の特徴の一つで、
 読者にとつては便利には^{たすもの}ちかいないが、文学史
 の名に値するためんは、あまりにも~~ジャ~~ナ
 リステックではないのかと思われる。
 今日私が特に要望するのは、古代から近世
 までは扱つた第二種の文学史である。従来の
 いちゆる「国文学史」は、専門家が国語の教
 師・学生以外には、強ど読むことができない

私には

なの

ほど、無味乾燥なものであつた。武田祐吉氏
 の『日本文学史要説』(昭和二四年)は大学初
 年と高校の学生用として書かれたものである
 が、サキに述べた教科書類とは趣きを異にし、
 固有名詞の記鑑を避け、全体にわたつてかた
 り常識的に、いくぶん読み易くできている。
 このような精神で、さうと常識的に、さうと
 詳しく書かれた文芸史が欲しい。固有名詞と
 材料をあの程度にとどめ、説明をさうと詳し
 く平易にする。少しでもおぼつかしいと思われ



する引用文には現代語訳をつけ、和歌や俳句に
 も簡明な解説をつける。その上に多数の図版
 を入れるなら、第二種の文学史に近いものな
 るかと考えられる。もつとも図版といつて
 小、單に文献と肖像ばかりでなく、時代と文
 学の関連を示すような、宮廷・貴族・僧侶・
 武士から庶民にいたる、各階層の生活を現物
 したものがほしい。生産や風俗や戦争~~戦~~の
 ような国民生活の背景を見たいで、古い時代
 の興味ある文学史を書くことは、まづたく無

理だと思ふ。

以上の二種のほかに、義務教育を終った人
 たちが、文学に関する知識をほとんど豫想し
 ないで読めるよくなる、ほんとうに国民大衆向
 きの文学史入門が要望される。これを第三種
 の文学史とよぼう。こういう文学史では、何
 よりもまず細々しい事実と固有名詞をできる
 だけ省くことが大切である。つぎに古代から
 近世までについて、古語と特殊な専門語を
 使わずに、まづたく現代の日常的な言葉で書



かんけいなければならぬ。その上に、できるだけ
 日常生活と結びつけながら、平易に歴史や社
 会と文学との関連に注意をはらった、たくさ
 んの図版を入れた文学史が望ましい。
 猪野謙二氏の『近代日本の文学』(昭和二
 六年)は、とくに年少の読者を啓発する目的
 で、注意深く書かれたものであるが、これ
 などは明らかに第三種の文学史に属すると思
 う。この書物に對してはいろいろの議論があ
 るかも知れないが、年少の読者にふかい感銘

を
与
え
た
、
か
よ
う
な
文
学
史
の
價
値
は
、
十
分
に
認
め
ら
れ
て
よ
い
か
ら
う
。

(「日本の数学」(岩波新書)の著者)